

📌 【与謝野晶子と赤倉・池の平】

コロナがともかく大変だ。世界中ですでに600万人近くが亡くなっている。日本だけでも累計感染者数が360万人に上る(2月10日現在)。よく引き合いに出されるのが前回のパンデミック、つまり1918年から20年(大正7年から9年)にかけて世界的大流行となったスペイン風邪だ。元来は第一次大戦中、アメリカのカンサス州の兵営で始まったのに、なぜかスペインの名がついてしまった。スペインは第一次世界大戦の交戦国でなかったため、自由に報道されたためだそう。ヨーロッパ主要国は報道管制が厳しくて、多くの兵士が病に倒れていることなどはいっさい世間には知らせなかった。

今回はさすがに(トランプ元大統領以外は)中国風邪などとは言わないが、流行病に他所の地域の名前をつけるのは、どこも同じようだ。ちなみにドイツでは梅毒のことをフランス病という。フランスではスペイン病というそう。日本でもキリシタン宣教とともに到来したために、南蛮病と言ったりしたようだ。いずれにしてもスペイン風邪では、世界中で数億人が罹患し(当時の世界の人口は今の78億人の4分の1の20億人程度)、少なく見積もっても数千万人の死者、日本だけでも感染者2300万人、38から40万人の死者が出たと言われている。ドイツではまだ比較的若かったマクス・ヴェーバーが56歳でこの病で斃れている。オーストリアではどなたもご存知のウィーンの画家エゴン・シーレも28歳の若さで犠牲者となった。ウィルスは凡人と天才の区別をしない。日本では島村抱月や、日銀本店(現在は旧館)の設計で有名な建築家の辰野金吾が亡くなった。

ベルサイユ講和会議中のアメリカ大統領のウィルソンもかかったようだが、日本では、11人の子沢山の家族ごと罹患し、その思いを新聞に連載した与謝野晶子が有名だ。与謝野は当時の罹患の様子や政府の対応などを『横浜貿易新聞』(現在の『神奈川新聞』の前身)に連載した。連載記事は『感冒の床から：与謝野晶子スペイン風邪論集』として1冊の本にまとめられて、200円程度の安価な値段、Kindleで購入可能だ。読むとすでに予防注射があつたらしい。拒否する人もいたようだ。晶子は「予防注射をしないと云う人達を多数見受けますが、私はその人達の生命の粗略な待遇に戦慄します」と書いている。もっとも、現在の識者の見解では当時のワクチンに効き目があつたかどうかは不明とのことだ(これについては雑誌『ウィルス』に元国立予防衛生研究所所長の福見秀雄氏の論文がある)。

(https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsv1958/35/2/35_2_107/_pdf)

家族中が咳と熱にうなされている中で、与謝野は、生命も死も所詮は万物の流れの一環だと仏教的に達観しながら、ただ、私が死んだら子供たちはどうなるのかと考えると死ぬわけにはいかない、意地でも生き抜くといったことを述べている。「現に私の家で子供達が次々に咳をして発熱している」。今のコロナと同じで、高齢者が中心に亡くなったようだが、それでも若い人も死んでいる。知り合いのベルリン留学中の、30歳を越したばかりの若い医者が彼の地でなくなった知らせの「電報が文部省を経て親族の間に伝えられ」ている。でも「私の子供達の扶養の全部責任が親二人の肩に掛っている事を片時も忘れずにいる私は、自分もまた容易に死なれない身だということを・・・痛感している」。「私は死なれない。何としても

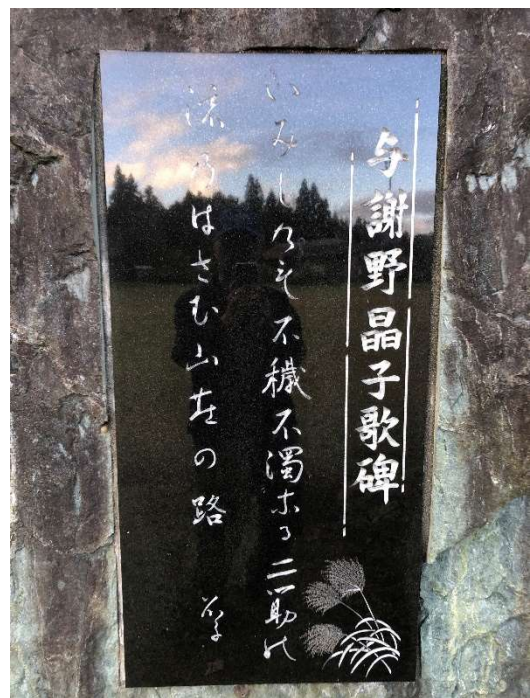
生きなければならぬ。・・・私の命の大部分には私の十一人の子供が入っている。私の死は其等命を危くすることだ」。

そういう気持ちでいるから、政府の後手後手の動きに猛烈に腹を立てている。危機感が乏しい、必要なのはロックダウンだというのだ。「政府はなぜ逸早くこの危険を防止する為に、大呉服店、学校、興行物、大工場、大展覧会等、多くの人間の密集する場所の一時的休業を命じなかったのでしょうか。そのくせ警視庁の衛生係は新聞を介して、成るべく此際多人数の集まる場所へ行かぬがよいと警告」しているのですと憤慨している。「盗人を見てから縄を縛うと云うような」政府の場当たりの「便宜主義」は「愚鈍とも、怠惰とも、卑怯とも、云いようのない遺憾な事だと思えます。予防と治療とに人為の可能を用いないで流行感冒に暗殺的の死を強制されてはなりません」。そして今でも多くの識者が述べているのと同じようなメッセージを発している。「国民の衛生に就いて親切な国家的設備の無い我国では、国民自身が細心にこういう悪疫の予防を講じることが何より大切です」。そして手洗いと1日に何回ものうがいの必要性を説いている。国は何もしてくれない。自分の身は自分で守ろう、というわけだ。ここには日露戦争に出征する弟に送った有名な「君死にたもうことなかれ」の思いが生きている。

閑話休題。結局は家族全員大過なくスペイン風邪を乗り切った与謝野晶子だが、その後、時には夫の鉄幹と、また鉄幹の死後は単独でなんとか、池の平や赤倉温泉を尋ねているのだ。そして池の平には、晶子の歌碑が立っている。これが今回のメインの話題だ。

池の平いもり池の湖畔からランドマークの四辻に向かう道の右側のイベント広場の一角に（池廻屋の近く）ある歌碑は崩し字で私のような素人には判読が難しいが、石碑の裏には読み下しが記されている。

「いみじくも不穢不濁（ふえふだく）なる二筋（ふたはし）の流のはさむ山荘の路（みち）」もちろん、これだけ読んでも意味不明だ。「不穢不濁（ふえふだく）なる二筋（ふたはし）の流れ」とはなんのことだろう。石碑の横にある背景説明を読まないは無理だ。実は与謝野晶子は1938年（昭和13年）9月、当地に山荘を構えていた憲政の神様と言われる尾崎蓴堂（尾崎行雄）のもとを訪れ、優雅に歌会に出席した時の歌だ。晶子は、交流のあった尾崎が歌の道と政治の道の両方に通じていることに尊敬の念をいただいていたらしい。「二筋の流れ」とはそのことだろう。そして清廉潔白で知られた尾崎の政治姿勢と、もともと金儲けとは無縁の風流の道を合わせて「不穢不濁」と読んだのだろう。その二つが一つとなって山荘に向かっていることを匂わせているのかもしれない。尾崎の山荘「楽山荘」がどこにあったかわからないので、何とも言いようがないが、いもり池の下の斜面には小さな流れがいくつもあるので、



具体的にはそうした小川を指しているのかもしれない。もっとも尾崎は業界団体からの献金を受け取らず、清廉潔白ぶりは鳴り響いていたが、政治資金は多くの場合友人から借金していて、しかも返さないのが有名だったらしい。そのことを酒席で原敬に皮肉られたときにはぐうの音も出なかったという逸話がある。

池の平にはいもり池湖畔の北側入口にもこのときの歌が歌碑になっている。

「われは行く嵐の中に白露のかがやく朝の池の平を」
「硫黄の香樋より洩るるに導かれ楽山荘に帰る夕ぐれ」
「秋風が越の海より上るなり赤倉山に昔思へば」
「白樺の林の中に蟲鳴きて池の平の月夜となりぬ」
「山荘のかがりは二つ妙高の左の肩に金星とまる」



やはり、三つ目が一番響きがいいという点で、歌碑の建立者たちが一致したのだろう。まんなかの「秋風が・・・」は大きく彫られている。しかも晶子の自筆とのこと。この二つの歌碑とも比較的最近妙高市が建立したものだ。夏の午後に散歩がてら行ってみるのもいいかもしれない。

与謝野晶子・鉄幹夫妻はこれよりだいぶ前の明治38年に赤倉温泉の今も存在する

香獄楼を訪れている。その時の次の歌は同旅館に表装されて残っているようだ。他の遺品もあるそうだが、コロナ禍で訪問してみるわけにも行かないのは、残念だ。

「山暮きてたまたまひとつ螢とび見上くる空に霧しろく降る」(鉄幹)

「たおやかに香獄楼の軒にきぬ朝の光をふくみたる雲」(晶子)

記録によれば、二人は、当時有名になりつつあった(軽井沢をも凌ぐ勢いだったらしい)この保養地を4回も訪問している。

大正10年(1921年8月)の訪問時に作った歌は以下の通り。

「観音の千手のやうにことごとく等しき丈の赤倉の杉」
「赤倉の山少女ども淡いろの雲の中にて盆の蕎麦打つ」
「杉と云ふ山の木もまた明星も香獄楼の客におもねる」

大正13年(1924年8月)にも再び赤倉に遊んでいる。

「妙高の山のむらさき草に沁みたそがれ方となりけるかな」
「赤倉の山より出ずる雲ゆえにおぼろなるや北海の門」

この赤倉行きするときには野尻湖にも寄ってくれたようだ。「野尻湖にて」と題した歌がある。

「白くしてこれは冷たき唇ぞ吸はで去らまし野尻の湖水」

「身に沁むは心苦しけどもそのさまに
あまり遠かる野尻の湖水」

なんとなく野尻湖にはつれない感じだが、友人の有島武郎が軽井沢で6月に人妻と心中したあとの赤倉訪問（大正12年、1923年）では野尻湖を遠望しながら故人を忍んでいる。

「赤倉に野尻の水を見しほどのさかひ
にせめて君のおはさば」

正直言って、「秋風が越の海より上るなり赤倉山に昔思へば」を除けば、さすが日本を代表する歌人と言われるのは当然と思えるような歌は、少なくとも私の干からびた感性から見ればない。グリーンタウンのニュースレターに掲載された会員諸氏や事務所の方々の歌の方がうまいかと思う。なにしろ、晶子は生涯に5万首も詠んだという。月並みなものも多いのは仕方ないかもしれない。

鉄幹は初期には大成功を収めたが、その後は不作と駄作が続き、二人の生活は、鉄幹が1919年42歳で慶應大学の教授の職を得るまでは極めて苦しかった。多作なのはそのためとも言われている。だが、尾崎を池の平に訪ねたときには、鉄幹はすでにこの世にいなかった。

尾崎と晶子がどんな話を山荘でしたかはわからない。とはいえ、当時、日本の行方を深く憂いて、国会でも有名な反大政翼賛会の演説をした尾崎行雄だ。晶子も先の感冒日記の中で、鉄道院が当時一等車、二等車、三等車とあった区別を縮小して、一等車を廃止したことを喜んでいる。また、スペイン風邪の最中に金持ちが個室に入れる制度を京大病院がやめたことに満腔の賛意を表していることを思うと、二人の話は合ったに違いない。彼女がエッセイでよく引いたのは列子の「均しきは天下の至理なり」という一文だ。

参考：https://search.yahoo.co.jp/image/search?rkf=2&ei=UTF-8&gdr=1&fr=wsr_gs&p=

